

長屋物語

山本周五郎

長屋物語

五郎

光風社

長屋物語

著者との申合せにより検印を略します

昭和三十六年八月五日 印刷
昭和三十六年八月十日 発行

定価 二八〇円

著者 山本周五郎
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定祥

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(三三)〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

人情裏長屋

七

壹兩千兩

四

長屋天一坊

六

若殿女難記

一四三

わたくしです物語

一六七

装幀 佐多芳郎

長
屋
物
語

人情裏長屋

一、おちぶれて来る人の寄り場所

松村信兵衛に会いたい人は京橋炭屋河岸の丸源という居酒屋にゆけばいい。もし丸源にいたくつても、よそを捜すよりそこで待っているほうが早く会える。住居は木挽町一丁目の十六店という裏長屋であるが、殆んど寝るときのほかはいた例しがない。——と、云えばおわかりであろう。彼はいつも酔っている。浪人だということは慥かだし、これといって稼ぐ風もみえないが、年じゅう酒びたりのうえに相長屋で困っている者があるとよく面倒をみる。

年はまだ三十になるまい、眼にちよつと涙みはあるが笑うと人なつっこい愛嬌が出て、子供たちにも、「松村のおじさん」と人気がある。いつも垢のつかない着物を着て、髭も月代もきれいに剃っているから、素面しらふのときはなかなか凜とした人品だ。初めは、「さる御大身の息子」だとか、

「実は大名の御落胤だそうだ」などという噂さまで立ったくらいである。

だが移つて来て一年ほど経ち、そんな容子のないことがわかると、こんどはいつたいあれだけ飲む金がどこから出るだろうという不審が起つた。と云つても、そのために悪く詮索するとか毛嫌いをするようなことはない。仮に疑がわしい事実があつたにしても見て見ないふりをし、いざとなれば庇つてやる氣持にもなるのが、こういう貧しい人たちの人情である。

もちろん信兵衛のばあいは、そんな不審もすぐ消えてしまった。長屋うちで稼ぎ手に寝られるとか、仕事にあぶれて困る者などがあると、さりげなく米味噌を届けさせたり銭を持っていって遣つたりする。「どうせ持っていれば飲んじまうんだ、困るときは誰でもお互いさ」決して相手に遠慮やひけめを感じさせないさうとした態度である。——こういう訳で、もうずっと以前から松村信兵衛は、長屋ぜんたいの「先生」と慕われていた。

彼の隣りに夜鷹そば屋の重助という老人が、十八になる孫娘のおぶんと二人で住んでいた。信兵衛が初めて移つて来たときおぶんはまだ十五だったが、お祖父さんに云われて彼の世話をするようになり、それ以来もう三年も煮炊きや洗濯の面倒をみている。まる顔でちょっと眼尻の下った温和しそうな娘であるが、実は芯にきついところがあり、年に似合わない氣丈な性質をもっていた。彼女は信兵衛のことを「うちの先生」と云う。ほかの者には長屋ぜんたいの先生なのだが、おぶんがそう云う段には不服はないらしい。

「よくないわよおぶんちゃん、偶には先生になんとかお云いなさいよ。幾らなんでもあんなに飲ん

でばかりいちゃあ毒じゃないの、いまにきつと体をこわすわよ」近所の神さんたちはこんなことを云うくらいである。「あんたの云うことならお聞きなさるんだから、少しは加減をするように云つておあげなさいよ」

「あたしもそう思うんだけど、ほかの事ならともかくお酒だけはだめよ」おぶんは哀しげな微笑をうかべる。「お好きもお好きなんだろうけれど、なにか酔わないじゃいられないようなことがあるらしいわ、醒めた時の寂しそうな顔は堪らないわ、迷子になった五つ六つの子供のような眼つきをなさるの。とても飲むなんて云えないのよ」

女性のなかにはごく稀に男の氣持を敏感に悟る者がある。おぶんの推察はかなり正しいようだ。酔い過ぎたときとか醒めているときなどに、信兵衛のもらす独り言は絶望的であり冷笑と侮蔑ぶべつに汚れている。その眼つきや表情には現在の貧しい環境のほかの凡ゆるもの、特に権力や富や威厳などに對する否定と嘲弄ちやうろうの色が明らかであった。——居酒屋の丸源で彼が飲むときには、いちばん安い酒にいちばん安い肴と定っている。心付は法外なくらい置くが、酒肴は必らずいちばん安いのを誂あつらえる、常連の熊公八公らと近づきになってから盃をさすのに、「済まないが一杯つきあって呉れ」と、下手したでに出るのが定りだ。

初めのうちは誰にもこの謙遜の意味がわからなかった。すると或る宵のことだったが、三十二三になるふりの客が一人まぎれ込んで来た。どこかの通い番頭というものらしい。髪を油で光らせて、

やわらか物を着て、襦袢の衿で首を絞めるような恰好で、雪駄の裏金をちらちらさせて、入つて来るなりから店の中を眺めまわしたが、

「このうちでいちばん高いお酒を持つといいで」と黄色いような声を出した。

それから壁に貼った書出しや、そこにあるつけ板の品書きを見ていたが、

「このうちじゃあここに書いてある物つきり出来ないのかい、鯛の刺身とか蒲焼とか鱸のあら、ぐらい無くっちゃ飲めないじゃあないか、酒の肴はきどりといって少しぐらい高価くつてもきれいとでないとうまくないよ」

「へえ相済みません」亭主の又平が温和しく頭を下げて、「なべ公お銚子が上った」

つきだしに爛徳利をのせて盆を出すなべ公という十三になる小僧が運んで来て置くとたんに、
「このお酒は幾らだい」ときた。

なべ公が恐る恐る「幾ら幾らです」と云う。

こっちは盃でちよいと舐めてみて、軽侮に堪えないという顔をする。

「値段だけのものだね、これがいちばん高価のかい、もっと高価いお酒はないのかい」
なべ公は尊敬の余り水っ漬をすすった。

「ええ、これがお客さんいちばん高価いんです、お菜はなにを上りますか」

「なにをといたってこれじゃあ一つも喰べられるものはないじゃないか、親方にそう云ってお呉

れ、神田川から鰻でもとれないかって」

店の中はしんとなった。虎も熊公も竹造も八もいかれのかたちである、この手合はふだん鼻っばしの強いことを云うくせに、金持とか厚顔あつかましい人間の前へ出るとだらしもなくしぼんでしまう。

——それでもねえ、またどんな事で世話になるかも知れねえから。こう考がえる癖が身に付いている。自分ひとりでは生きられないということを知っているからであるが、彼等はいつを逆手に取ったのさばるのが通例だ。……みんな肩をすぼめて、話し声もちょっと途絶えた。そのとき松村信兵衛が、

「おいそこの番頭さん」と呼びかけたのである。「おめえ店の錢箱から幾らくすねて来たか知らねえが、一世一代の積りなら座敷のある家へ這込んだらどうだ、ここは居酒屋といって地道に稼いだ人間が汗の匂いのする錢でうちわにつつましく飲む処だぜ、済みません場違いですがお仲間に入れて下さい、こういう気持で来るんならお互いさまよ、みんなの飲む酒みんなの喰べる肴で、御馳走さまと云って飲むがいい、なんだ、白痴こけが火見ひの櫓みへ登りゃあしめえし、高え高えが聞いて呆れらあ、気の毒だが勘定は払ってやるから出ていって呉れ、まごまごすると向う怪を——」

その者は一議に及ばず退散した。亭主もなべ公も、熊も八も虎も喝采した。そして松村先生の謙遜の意味が初めてわかったのである。この店は地道に稼ぐ人間が汗の匂いのする錢でつましく飲む処だ。場違いですがお仲間に入れて下さい。詰りそれである。従って、こういう処へ来てまで人

をみくだしたり、金をひけらかしたりする人間には容赦をしないのであった。

朝十時に信兵衛は起きる。おぶんの給仕をして呉れる味噌汁に飯一碗、武家育ちのきちんとした生活が癖になっているのだろう、どんなひどい宿酔でもこれだけは欠かしたことがない。

但し美味くはないとみえて喰べるのに時間がかかる。それがまたおぶんにとっては彼と話しの出来る唯いちどの機会であつたが。

「佐平さんの跡へ昨日お侍の方が越しておいになりましたわ」食後の茶を注ぎながらおぶんが云つた。「まだお若い方の方ですけれど、お気の毒に奥さまに亡くなられて、乳呑み児を抱えていらっしゃるわ」

「それあどうも——」信兵衛は辛そうに眉をしかめた。「なんという人だ」

「沖石主殿と仰しゃいました。御挨拶にみましたから後でいらして下さいまし」

「なにか持つてゆきたいが、なにがいいかな」

「赤ちゃんがいるんですから水飴なんかがようございましょう、あたし買って来ますわ」

「そうして貰おう、おれが水飴を呉れなどと云つたら天氣を怪しまれる」

おぶんが表通りへいって水飴を買つて来ると、信兵衛はそれを包んで、一軒おいて右隣りの新しい住人を訪ねた。——沖石主殿は二十五六だろう、辛勞のために蒼白く痩せてみえるが、意志の強そうな眉つき唇もとで、言葉も態度もきりつとしていた。寝かしてある赤児が泣くのを気にしな

がら、「主家を浪人したうえ妻に死なれ、嬰兒を抱えているので近所の厄介にならなければならない。宜しくお頼み申す」こう云って頭を下げた。

「及ばずながらお力になりましょう」信兵衛は励ますように云った。「こういう裏長屋はたいいてい世間からこぼれ落ちた人間の集まりです。みんな不幸や不運の苦い味を知っていますから決して不人情なことはしません、困ることはみんなでお手伝いしますよ」

「どうぞ呉々も宜しくお願い申します」

主殿は垂れた頭をあげることが出来ない容子であった。——別れを告げて出ると信兵衛はその足で差配の平七老人を訪ねた。

「沖石という人の店賃はおれが払うからな、然し当人には決して知れないように頼むぞ」

「そう来るだろうと思ってましたよ」平七老人は中つ肚の態である。「いまだって五軒もの店賃を払ってお遣んなさるんですぜ、まあ好きなようになさいまし、そのうちに十六店ぜんぶの店賃を払えばお氣が済むでしょう」

「どうしてそうすぐに肚を立てるんだ、いちど医者に診て貰うほうがいいな、肝臓に病氣があると怒りっぽくなるそうだ、——頼むぞ」

平七がむきになってなにか云い返そうとした。然しこっちはさっさと路地を出てゆき、角の三河屋の店先へいって立った。これも三年このかた欠かしたことの無い日課だ。小僧の定吉はまじめく

さった顔で、どんなに大事なこともなんぞのようにこう叫ぶ。

「ええ先生に一升^{ます}斟^まで、願いますう」

二、相手を立てて、それから沙汰

五合斟^まで冷を一杯。急ぎはしない悠くりと飲んで三河屋を出た。

「さて今日はひと稼^{かせ}ぎか——」

こう呟^{ささや}やいて歩きだした信兵衛、半刻ばかり後に、日本橋へとやって来た。もうすぐ親父橋という町筋の一角に、神伝流剣法指南、折笠五郎左衛門と掲げた新らしい道場がある。新らしいが繁昌しているともえて、竹刀の音や矢声がびんびんと建物に反響して聞えた。

——信兵衛は玄関へいって案内を乞い、現われた門人に向って、

「ひと手御教授を」と、横柄^{おうへい}に他流試合を申し込んだ。その文句が凄いのである。

「拙者はこれまで各地を遍歴し、念流一刀流^{かじは}梶^{しん}派^{かげ}新蔭^{しんかげ}、無念流鹿島神流あらゆる師範と試合を致し、いまだ曾て敗北したことのない修業者でござる、折笠殿の御高名を聞き及び、ぜひともお手合せを願いたく参上つかまつた、取手呉兵衛と申す、宜しくお取次ぎのほどを」

文句も態度も明らかに道場荒しである。新らしく開業して門人の手前もあるし、草鞋銭で帰すに